

## デザイナーのための経済コラム（10）

エビデンス (evidence)、または平均値のマジック

エビデンスとは証拠、証言などの意味がありますが、日本語として、エビデンスという言葉が使われる場合は、科学的証拠、科学的実証というように限定して、使われることが多いようです。この場合に意識すべきことは、言葉、用語の定義です。会話の中で、言葉の定義が互いにズレていることに気が付きます。気が付かない場合は、気が付くまでズレが持続していくことになります。

特に、社会現象を定性的に議論している場合に起こりやすいズレです。時には意図的に定義をしないことや、定義の内容を拡大したり、縮小したり、ズラしている場合があります。日常生活では大きな障害になることは無くても、重大な問題や課題に対しては、定義を確認する必要があります。経済学の専門家の間では大きなズレが無くても、部外者、素人が入るとズレが問題の議論を困難にしています。

新型コロナウイルスを「covit19」と呼んでいます。さらにDNA分析で変異ウィルスを特定し名前をつけています。専門家は正確さを意識して使用します。医学の世界では当然正確さ、精密さが要求されます。「百聞は一見に如かず」というけれど、見れども目には見えず、触れども形がわからず、匂いがかげども臭わず、こんな「covit19」に対処している方法がタンパク質の生化学分析と統計的数値、測定値です。感染再生倍率、重症化率、致死率、血中酸素飽和度、クラスター、エクモ、抗体、PCRテスト、抗原テスト・・・いままで聞いたこともないような専門用語が飛び交っています。これらの専門用語が定義もなく、感覚的に使われていたら「covit19」に対処することはできないことです。

新しい発見があつて、それが認められれば、既成の定義が変わることもあります。常識と思われていたことも変わります。21世紀は常識が覆ることの連続とも思えます。KIPA メールマガジン令和2年11月号の図書紹介で竹内均著「99.9%は仮説」では科学の世界では常に仮説が書き換えられることを前提にして研究分野の最たるのがノーベル賞の世界です。ノーベル経済学賞はその中でも少し違います。新しい経済理論が世の中に貢献するとは必ずしもいえない分野だと思えます。金融工学の世界で、住宅ローンを集めて、別の形の債権に作り変え、ファウンドとして売り出すことが考えられ、証券市場に新しい市場を作り出したことでノーベル経済学賞となった理論がありました。この理論を過剰で、過激な展開をした結果、リーマンショックを引き起こし、世界の経済を混乱させたことでした。

デザイナーのための経済コラム（8）で少子高齢化と高齢化率、後期高齢者についてを書きました。その後、高齢化率を調べて気の付いたことは、高齢化率という数値に計算上の間違いがないとしても、データをとる対象地域、グループによって数値が大きくバラついてくることです。日本全体の高齢化率を基に政策を立案する場合と細かく地域を分割して高齢化率をだして政策を立案する場合、当然違いが出てきます。より適切な政策は後者の場合です。平均値のマジックが対応の過不足を発生させます。

「covit19」の感染者数、重症化率、致死率などは対象範囲を都道府県単位の数値です。対象範囲を狭くするとそれらの数値は急に大きくなります。会社、工場、学校、町内、さらには親族、家族と狭い範囲に絞れば怖くなるほど数値は大きくバラついてきます。ホットスポット・クラスターだけに限定すれば、感染率、重症率、致死率は急増します。感染率の小さいな平均値だけ見れば、危険は少ないようでも、状況次第で感染率は100%に近づきます。平均値に惑わされないでください。同じことが福島の原発事故による放射線汚染の測定にも言えます。地域の平均値とその中のホットスポットやクールスポットでは数値はバラつきます。「論より証拠」、「君子危うきに近寄らず」。

(T,K.記)